

はじめに

9月某日、事務局から『防衛大学校—知られざる学び舎の実像—』を手渡され、所見文を書くよう依頼された。

もとよりネット等で気になっていた書であり、いざれ読むつもりであったので、断る理由はなかった。それ

以上に私が卒業生であると共に、ほとんど経験できない大隊首席指導教官として学生の訓育指導に携わって

おり、さらには恩息が卒業したから父兄としての立場からも、その関係は誰よりも深いと言わざるを得ず、

読後の感想文の出来不出来は別として書かねばならぬと思ったのだ。

私の学校長は入校時、第2代大森寛氏、卒業時は第3代猪木正道氏であったが、その思い出は申し訳ない

ことにほとんどなく、むしろ在校間も卒業後も大きな影響を受けたのは初代校長の楨智雄氏であろう。

官として仕えた第5代の夏目晴雄氏であった。

防大の最大の理解者國分良成氏

國分校長は慶應大学教授で2期目の同大学法学部長時に防大で校長就任を打診されている。

時の政権は民主党政権時であり、受けた大きな要因の一つに東日本大震災の自衛隊の活躍があり、自衛隊

トップの折木統合幕僚長のあまりにも堂々とした対応に感動し、そうした人物を育てた防大に就職すること

の名譽を感じたと述べている。また國分氏の恩師である慶應大学塾長石川忠雄氏の影響も大きなもの

だった。石川先生は第3代学校長の猪木正道氏の後任を打診されほぼ受諾されていたのだが、直後に慶應大学の塾

長に選出されたことにより断った経緯があり、恩師のかなえられなかつた仕事を補うのは弟子の仕事でもあ

ると述べている。文章の端々に途中採用者と自称する國分氏が自ら防大組織に飛び込み、

組織をいづくし、たくさんの涙とともに学生を育て上げる姿勢がこの書物の随所に書き表されており、読

む私も思わず目頭を押さえながら読ませていただいた。

私たち17期生が65歳のホームカミングデイ時、前夜のパーティーに参加され、その折のあいさつは「私は

20期生で皆さんが4学年の時の1学年に当たる年齢で」とあいさつされたのが印象的だった。まさに防大

生になろうとした学校長でもある。



17期ホームカミングデイで挨拶される國分学校長（2016年3月）

教育者・管理者としての國分校長

防大には教官をはじめとして、事務官・技官、そして陸、海、空の自衛官が勤務しており、それぞれの立場から「防大のあるべき姿」を異に

することがあり、それはたびたび激論を戦わすことにもなる。このような意見の違う防大の組織

の教育者・管理者としての学校長は

よほど防衛大学校と防衛大学校学生を好きでないと、9年間も続けることはできないだろう。

國分学校長は「世界一の防衛大学校」を目標に掲げ、自ら学生の中に飛び込んで校務運営をされたのだ。

その立ち位置は常に学生への限りない愛情を基本とされており、9年目の最後の卒業式式辞では「もし生まれ変わることができれば、次回は防衛

大学校に入りたくいとひそかに思っております」と述べたほどだ。

9年間の勤務では保険金詐欺事件、学生の行き過ぎた指導事案、死亡事故等々たくさん辛い思い出があり、それを管理者として冷静に対応、改善された記述に接することができる。

その立ち位置に一度のおれも揺らぎもなく常に「世界一の防衛大学校」を目標に、組織を鼓舞し続けた様がこの記述のすべてにわたり読み取れ

る。一方で國分校長は、シニアの卒業生から「最近の若者は」という表現を聞いた記憶がない。皆、口を揃えて言うのは「学生たちはよくやっ

ている」と述べており、同窓会の応援に感謝されているのだ。

防衛大学校の原点「榎智雄」校長

この書物の多くのページを割いて記述されているのは当然とはいえず、初代中学校長「榎智雄」先生である。

國分中学校長にしてみれば慶應義塾の大先輩でもあるが、それとかかわりなく防衛大学校の存在と本質を突き詰めれば、おのずと「榎智雄」校長を述べなくては防衛大学校を論ずることは不可能であると認識されている。

戦後の警察予備隊の創設から士官養成の要求があり、時の総理吉田茂慶應義塾の小泉信三から推挙された榎智雄中学校長の思想と、勤務された9期生までの教えが防大の礎となっていることを國分校長は見抜かれている。

また榎智雄初代校長の末期、9期生によって創設された学生綱領にも思いを寄せている。校長は『礼節』はともかくも「廉恥」や「真勇」という言い回しは当時の学生たちの成熟度合いを感じさせる。おそらくは七転八倒してひねり出したというように、日常生活の中から浮かび上がったのではないかと思う』と述べている。

だからこそ初代校長の「榎智雄」

先生を研究してその土台の上で、学
校長の職責を全うされたのだ。

防衛大学校の未来

國分校長はその勤務目標にも「世界一の士官学校」を目指してこられて、そのポイントを7項目に絞った。その第一は「体制的基盤」である。それは財政的基盤の上に成り立つ組織の整備であり、いまだ学位授与機構から授与される学位の自らの授与である。

さらに学生に望むのは「知性」であり「体力・気力」である。またすでに築かれた「自由と規律」であり「使命感と寛容性」さらに「日本人的美徳」をも加えて高みを目指すと述べている。

この國分良成著『防衛大学校』は父兄・卒業生はもとより、安全保障に携わる関係者皆様にお勧めする良書である。

